

## 1995年兵庫県南部地震に先行して現れた近畿地方中部の地殻歪異常

## Unusual conditions of crustal movements in the central part of Kinki district preceding 1995 Hyogo-ken-nanbu earthquake.

# 森井 互 [1]; 尾上 謙介 [2]; 中村 佳重郎 [3]; 大谷 文夫 [4]; 細 善信 [5]; 和田 安男 [4]

# Wataru Morii[1]; Kensuke Onoue[2]; Kajuro Nakamura[3]; Fumio Ohya[4]; Yoshinobu Hoso[5]; Yasuo Wada[4]

[1] 京大・防災研・地震予知; [2] 京大・防災研・地震予知研究センター; [3] 京大・防災研; [4] 京大・防災研; [5] 京大・防災研・地震予知センター

[1] RCEP, DPRI, Kyoto-Univ.; [2] Research Center for Earthquake Prediction, Kyoto Univ; [3] DPRI, Kyoto Univ.; [4] DPRI, Kyoto Univ.; [5] RCEP, DPRI, Kyoto Univ.

京都大学防災研究所附属地震予知研究センターでは、近畿地方を中心に多数の観測点を配置して地殻変動連続観測を行っている。それらの観測点のうち、近畿地方中部に配置された3観測点（屯鶴峯・阿武山・天ヶ瀬）において、1995年兵庫県南部地震の5年前から地殻歪の異常が捉えられていた。最も明瞭な歪レートの変化を捉えていたのは屯鶴峯観測所であったが、阿武山・天ヶ瀬の両観測所においても屯鶴峯観測所の記録に歪レートの変化が見られたのと同時期に、同様の変化が見られた。1990年初頭に全ての観測所の記録で南北方向の圧縮が増大したことを示す歪レートの変化が見られ、この傾向は約2.6年継続した。その後南北方向の圧縮の増大は収まり、概ね一定の値を保ったまま約2年が経過した。1994年の半ばから明瞭な南北方向の伸長が3観測所全ての記録に現れた。歪レートの変化が3回生じ、しかも当初は南北圧縮であったものが最後には南北の伸長に変化したこと、また、歪レートの変化が10の<sup>-7</sup>乗から<sup>-6</sup>乗に達することから、この現象は、定性的にも定量的にも、震源断層のプレスリップでは到底説明できない。この現象は、紀伊半島の下で生じたフィリピン海プレートの部分的な固着とその解消の過程で生じたものであると考えられる。